

社会福祉における影元型と障害者元型

江口昇勇

キーワード：障害者元型、影元型、社会福祉

序 論

筆者は近年、福祉施設等で知的障害や精神障害、老化に伴う障害、非行や情緒障害等を背負った人々を世話する指導員やボランティアへの研修を多く行っている。社会福祉系大学の卒業生を中心とした「研究会」や施設が主催する継続的な「職員研修」等である。こうした筆者の取り組みの一部は「卒後研修」という視点から、事例研究（江口他、1991）¹⁾としてまとめた。一方、A新聞の厚生文化事業団が主催するキャンプに長年関与し、障害児と健常児との統合のあり方について、学生カウンセラーと討論を重ねてきた。それらは「障害者差別とノーマリゼーション」²⁾（江口 1990）として、障害者差別を分析心理学の〈影元型〉の概念を用いてまとめた。

筆者の理論的根拠は、C. G. Jung が創設した分析心理学である。殊に障害者の問題、あるいは福祉領域における筆者の鍵概念は、ユング派の分析家である Guggenbuhl-Craig, A.⁴⁾ (1985) が提起した「障害者元型」である。それは先の論文で、「影元型」として提起した問題をさらに発展させたものである。「障害者元型」が意味するものは難解であるが含蓄に富んでおり、福祉に従事している者には「目から鱗が落ちる」衝撃を与える内容であると思われる。それは福祉とは無縁な立場の者にとっては「死への準備教育」、「死の体験」の具現化としての意味があり、安易に理解されやすい「自己実現」概念への警鐘⁴⁾（山中 1989）となっている。

1) 無意識の存在を自らの内に体験すること

「障害者元型」、「影元型」の理解は〈無意識〉の存在を仮定することに始まる。精神分析学はこの無意識という仮定を認めることが前提であり、無意識を認めない行動理論のような立場からは以下の全ての議論が砂上の楼閣となる。筆者はもちろんそうした立場を排除するつもりはなく、以下の論は、「無意識を仮定として認めた場合に成り立つ」という条件付きの議論で

あることをお断りする。

それ故に、無意識の働きを「自らの体験として気づくこと」が大前提となる。無意識は S. Freud によれば、意識から排除され、抑圧された内容であり、意識には都合の悪い内容から構成されているため、通常は意識化することが困難である。S. Freud は「日常生活の精神病理」³⁾ (1901) で、我々の日常における失錯行為（度忘れ、言い間違い、勘違い）や様々な神経症的癖が、無意識から生じる力によって引き起こされていることを明らかにし、無意識の存在を伝えようとしている。我々が無意識に接近するには、そのような日常生活における失錯行為や、神経症的な癖を手がかりに意識化する方法もあるが、さらに身近な体験として、酩酊状態で自我がその抑圧の機能を減じた時に、日頃は隠されていた人格のある側面が出易くなることは誰しも経験することであろう。私は臨床における接近方法として〈夢分析〉を行っているが、ここではクライアントに夢を記録してもらい、夢を通して無意識の世界を探究している。夢を見ている間は睡眠中のため自我の働きが弱くなっており、その間隙を突いて夢という形で無意識からのメッセージが送られてくるのである。無意識を自らの体験の中で意識化するという作業には多少の意識の集中が必要であるし、それに抵抗を覚える人もいるので無意識を共有するということはそれほど簡単ではない。無意識の共有化という体験が、極めて個人的問題の出現を可能性として持つが故に、無意識を共有する個人間の信頼関係が重要であることは、いくら強調してもし過ぎることはないと思われる。

2) 精神分析の理論を学び、自己探究の一貫として [エゴ・グラム] による理解を行う

a) 精神分析の基礎理論

無意識の存在を自らの体験において確認することができれば、次に無意識を含むところの構造を〈精神分析の基礎理論〉から理解する。精神分析の入門書は容易に手に入るが、筆者は前田の「図説・精神分析」⁷⁾ (1985)、小此木の「精神分析理論」⁸⁾ (1980) を元に理解している。ここでは精神分析の理論的柱を提示することに留める。

- | | |
|----------------|--------------------|
| ア) 心の局所論、 | オ) 心の力学、適応論、 |
| イ) 人格の三分論、三層論、 | カ) 発達論、 |
| ウ) エネルギー経済論、 | キ) 退行の水準と精神病理の重篤さ、 |
| エ) 力動論、 | |

b) 心の適応について 一心の様々な病理一

「人間は〈生理的な早産〉の状態で生まれる」と語ったのはボルツマンである。それは高等動物になればなるほど、出生時には独立歩行など成体に近い形で生まれてくるのに、人間の場

合、高等動物の頂点に達しながら未成熟なままで出生することを意味している。その理由は脳の肥大化により胎児を子宮に留まらせることが不可能となり、生理的に早産せざるを得ないからなのであるが、この事実が人間の後年の様々な精神病理を形成するのに大いに預かっている。全くの無力で生まれた人間の赤ちゃんは全面的に母性的ケアに依存せざるをえず、そこに母親的役割を持つ人間との間で、複雑で、緊密な二者関係が生じることになり、その結果として様々な精神病理が生じる。最近では S. Freud の古典的精神分析の理論（ここでは父-母-子のトライアングル＝エディプスコンプレックスが中心テーマとなる）に対して母子関係の複雑な関係に焦点が当てられ、クライン学派、対象関係論学派、自己心理学派、マラー学派らが各々の理論や知見を提起している。

「心の発達」とは、精神分析的には〈自我の発達〉に負うところが大きく、それは自我心理学が明らかにしたように、無意識的衝動を自我がコントロールできること⁸⁾を意味している。「大人になること」は「子どもっぽさ」を克服することでもあり、適応しているとは、健全に発達した自我の働きにより、無意識の衝動（エス、イド）の圧力と超自我の要請や現実との調整がバランスよく行われ、自我防衛が成功している状態である。反対に、適応が崩れる、不適応となるのは、自我防衛に失敗したり、防衛が過剰になって神経症的な防衛となったり、更に重篤な精神病水準の反応を呈したりする場合をさす。そうした不適応の原因として、1) 早期母子関係における基本的信頼感の問題、2) 自我の形成過程での問題、3) 日常生活の基盤である家庭の安定性や環境におけるストレスの問題などが考えられる。

c) [エゴ・グラム] による心の理解

精神分析学の基礎理論を元に、個人の心の状態を体験的に理解するため筆者は、Erich, Barn, により開発された [エゴ・グラム] (末松他, 1989)⁹⁾ を用いている。自己理解には知的、認知レベルの理解はあまり効果を生じなく、情動を含めた体験的理解が必須である。

筆者は [エゴ・グラム] の実施に当たり、これまで様々な工夫を試みている。[エゴ・グラム] をそのまま実施するのではなく、評価する際にいくつかの条件を設定するのである。従来の「現実自己（ありのままの自分）」という軸の他に、「理想自己（自分がそうありたい、そのように見られたい自分）」という視点からの評価と、「ペルソナ自己（個人が無自覚の内に他者に見せている外向きの顔＝ペルソナの意である）」という他者による評価である。そこでの他者は、それほど親しくはないが、自分の外向きの顔を知る程度の知人から選ぶことにしている。こうした作業により、

1) 〈現実自己-理想自己〉の比較から、「自己受容度」を測定することができる。つまり、現実自己と理想自己のパターンが近似していればしているほど、個人は現実の自分が理想の自分に近いが故に、ありのままの自分を受容しており、内的安定度は高いと言える。反対に、そのパターンが逆転したり、大きく隔たっていれば、その個人は「現実自己」が「理想自己」と異なっていると認知している訳だから、ありのままの自分を受け入れがたく、自己受容が困難であると感じているのである。ただし、若干の問題があり、[エゴ・グラム] では適応のパター

ンが既に知られており、以上の議論は理想パターンが適応した、あるいはそれに近似のパターンである場合に限定されており、理想の [エゴ・グラム] が不適応なパターンである場合には更に慎重な解釈が必要とされる。

次に、2)〈現実自己ーペルソナ自己〉の比較からは、個人が自分に向き合って認知する自己像と、無自覚に他者に示している外向きの顔＝ペルソナ像との関係が写し出される。仮にそれらが正反対のパターンを示すならおそらく、そこでは極端な場合、二重人格の要素を持つ個人（原始的防衛メカニズムである「分裂＝スプリッティング」を用いるような）を見いだすことになる。現実自己とペルソナ自己にあまり差が見られない場合には、内的自己とペルソナ自己に乖離は見られず、内なる自分と外向きの自分が困難なく同居できていると思われる。ただし、ここにもいくつかの問題はある。評価する他者と評価される個人との関係や、評価する人の価値観、あるいは評価者のその個人に対する期待、羨望等の投影がどのようなものであるかによって、その意味には更に慎重な対応が必要となる。この部分の複雑な流れを専門家が直接に介入して、その意味を探求できる場合には有効な結果をもたらすことができるが、それが難しい条件下では、この方法を採用することは慎重にしなければならない。不用意な試みにより傷を受けることがないように配慮することは臨床家の最低の義務である。

上記の危険を避けるために筆者は最近では、[エゴ・グラム] の評価を、〈安定している状態の自己〉と、〈不安定な状態の自己〉という軸で評価をすることが多くなっている。これは後で述べる、自己の影元型に少しでも近づく体験を求めてのことである。実際にこの二つの軸で [エゴ・グラム] を実施したところ、安定している状態のパターンの方が不安定な状態のパターンよりもはるかに自我親和的であろうとの事前予想に反して、結果としては不思議なことに、不安定な状態の自己パターンに親和性を持つ個人が意外に多いという現象が生じた。安定している状態とは、言い換えれば「適応した状態」である自分を前提としており、無意識に抑圧したエスやイドを自我が巧みにコントロールした状態である。それに反して不安定な状態の自己パターンでは、エス（イド）が活性化し、衝動的であったり、破壊的、攻撃的状态にある。この側面が活性化すると不安や罪悪感、自己不全感が伴うのであるが、と同時に、抑圧していた無意識的なものを解放し、裏の自己、あるいは本音の自分との接触を味わうことから生まれる解放感、充足感も経験するようである。筆者としては、自我によって抑圧している無意識の部分を、意識にとって都合の悪い、統合できない内容とのみ見ることは表層的に過ぎると思われる。たとえ意識に都合の悪いものであっても、それを解放することによって味わうことができる生き生きした体験は、無意識の内容が持つもうひとつの側面を伝えているように思われる。

3) 無意識に抑圧された「影」を障害者に投影するメカニズムを発見する

我々が障害者と出会うとき、様々な反応あるいは転移・逆転移が生じる。それはポジティブなものからネガティブなものまでである。先に触れたアサヒ・キャンプでは健常児は障害児と出

会い、彼らとかかわる際に実に多様な型²⁾を示した。しかし、こうした反応の型は子どもたちに限らず、成人であっても同様に生じ、さらに福祉に従事する人間であってすらも、こうした転移・逆転移状況から逃れることは難しい。

どうして障害者とかかわるとき、このような転移・逆転移が生じるのか。それをまず障害者の要因から見ていこう。障害者といえども障害の種類によって転移・逆転移が異なった形で生じる。一般的に身体障害は障害の中でも健常者には比較的受容されやすく、同情のレベルではあっても、健常者は自らの良心を満足させるために彼らに手を差し延べることが多い。反対に精神障害者に対しては、「何をするか分からない存在」として彼らを遠ざけようとするし、忌避する傾向が顕著である。そこには了解不可能な存在という偏見と同時に、自分もいつそのような事態に陥るかもしれないという自らの精神病不安が背後にあって、自己を安全な立場に置こうとするあまりに過剰な隔離をするのではないかと思われる。

ここではそうした両極端な場合を除き、その中間に位置するものとして、またある程度の抵抗を感じる存在として知的障害児・者を例として検討してみる。まず、知的障害者の自我構造を見てみると、彼らは一般的に二重の意味での自我の弱体化、未成熟という問題を抱えていることが多い。そのひとつは本質的な知的障害による認知能力の弱さであり、情報の整理や統合力、判断と決定、実行における俊敏性などに制限を持っているが故である。知的障害を、価値的見方をあくまで括弧に入れて分かり易い表現を使用するなら、自我は人間のコンピューターの部分と考えられるが、その搭載するコンピューターが8ビットであるか、32ビットであるかによって様々な処理速度や、扱えるソフトの容量が絶対的に異なるという事実がある。それは当然の事ながら自我の発達や、自我の能力に一定の、そしてかなりの影響力をもたらすものと思われる。

もうひとつは、自我の健全な発達にかかすことのできない、Winnicott.のいう「ほぼ良い母親⁸⁾」との安定した関係が、知的障害を持つ乳幼児にはなかなか持ちにくいという状況がある。私はここで障害児・者をわが子に持っている母親(あるいは父親)を責めるつもりは全くない。多くの障害児・者の両親の苦労を共に歩んだ者としてそれほど酷い仕打ちはないと心底思うからである。だが客観的事実として、わが子が障害を背負っているという深刻で絶望的な運命を容易に受容できる人間は稀にしか存在しないのではないだろうか。わが子が「普通でない」、あるいは「普通であることを期待できない」という事実は、わが子の普通性を放棄しなければならず、それは健常な子どもに対して当然期待できる未来の断念である。この運命をどのように背負うのかという問題は、人間の根源的問題であり、それは「死の受容」との共通のテーマでもある。受け入れられない過酷な運命の中で自失呆然となり、混乱の極みに陥った両親に対し、わが子に「ほぼ良い母性」を期待すること自体が極めて無理な注文であり、そこで障害児の自我が歪曲化されたとしてもやむを得ない、というのが筆者の偽らざる所感である。社会環境の整備や援助システムの充実を計るべきであるという理想論を振りかざすつもりはない。いくらそうした条件が整備されたとしても、わが子が「普通になれない」という事実から生じる、障害受容の困難さには変わりはないからである。むしろ私が控えめに提言したいことは、障害

受容という「喪の仕事」¹⁰⁾ (渡辺 1989) を共に歩むことのできる夫婦、親戚、近隣、友人、あるいは医師やカウンセラーなどの専門家の存在である。障害受容にとって、最初の「障害告知」の重要性はとても大きな問題¹⁰⁾であり、このあり方によって障害受容に対する態度は大きく影響を受ける。障害の受容という困難な課題を乳幼児を持つ若い母親に要求することは酷なことであろう。障害の受容の程度は自己受容や他者(子ども)受容とに正比例する²⁾。障害を受容できない親はありのままの自分を受け入れることが困難となり、障害=価値が無い、と考えやすい。そして無価値な障害の子どもと自分とを同一視することから自己を愛することができず、最悪の場合には親子心中という悲劇が起こるのである。実際、障害児・者を子どもに持った親たちの中で親子心中を考えたことがない人は稀ではないだろうか。このように親の障害受容の困難さを強調するのは、彼らの子どもに対する親の態度に、溺愛とか、過保護、あるいは反対に拒否や、虐待、一貫性の欠如や両親間の不一致の態度が生じること²⁾を無理からぬものであると筆者は主張したいからである。もちろん、こうした態度を取ることなく、適正に障害を受容できて、自分と子どもとの境界を明確にして、自己受容も他者(子ども)受容も適切にできている親たちも稀ならず存在するであろうし、筆者は何よりそうした親たちが多くなることを望むものである。

こうした親側の要因のため、障害を背負った子どもたちは「ほぼ良い母性」に巡り合う機会は少なく、その結果、必然的に自我の適正な発達が阻害される。そして自我発達の阻害や自我構造の弱体化から生じる二次的なさまざまな問題として、無意識の抑圧=自我防衛の働きが機能しないが故に無意識の衝動がストレートに出易くなったり、また精神障害を引き起こす力に対する抵抗力が弱く、様々な身体症状化、精神症状化、行動化、問題行動(自傷・他傷、他者とのトラブル)を引き起こし易くなる。そうした諸々の障害者が示す問題は、彼らを援助する者の内なる「影元型」を刺激する。ここで「影」あるいは「影元型」について Kast, A.⁶⁾ (1992) から少し長くなるが引用したい。

「影元型」；影は我々が受け入れられない自分自身の側面に名づけられたものである。これらの側面は自我理想と一致せず、そしてしばしば社会において確立された価値と不一致となる。それ故、我々はそれらを抑圧し、他の人々にそれらを投影して見ることを好み、そこでそれらと闘うことができるのである。個人的影を辿っていけば、そこにはまた集合的影が存在する。

個人的影について：自分が気前がいいということを好んでいるような人は、彼あるいは彼女の影として利己的側面を持っている。攻撃的ではない、と見られることを好む人は、彼あるいは彼女が気づいていなくても、その影が布置されると攻撃的になるであろう。影はもし我々が注意深くさえあれば体験されうるかもしれないのである。我々はおそらく、自分を怒らせる人に対しても、できることなら気分良く応じたいと望むものである。がしかし、我々の声の中にはその怒りが見て取れる。もし自分の不愉快そうなトーンを認識し、それを抑圧しようとするなら、我々は友好的な人物であるという自己イメージを修正しなければならない。というのも我々は自分を理想的イメージに似せることを好むからだ。これは容易なことではない。もしそれに似せようとしなければ、結局、不安定と不安でもって反応するこ

とになるだろう。

夢の中で、我々は泥棒・殺人者・怠け者・サディストあるいはどん欲な人々として、影に出会うことになるかもしれない。夢を見ながら、あるいは夢を思い出すとき、もし我々がほとんどコントロールできないほど強い嫌悪を感じたら、それは疑うことなく影を扱わねばならないということなのである。これは我々が殺人者であるということを示しているのではない。それはむしろ殺人者から連想する、その特性を体験することができるという兆候である。我々自身と殺人者との差異は、我々には意識的コントロールによって、殺人癖という衝動の爆発を防ぐことができることである。しかし、そのような状況に直面するとき、自分が殺人者のように怒っているとか、あるいは完全に破壊的であることに気づくのは極めて明瞭である。我々は自分が信じているほどにバランスは取れていないのである。

我々は自分になりたいと思っているものばかりではない。影は我々をして意識的に反対しているまさにそのものが、自分の心の中に存在しているという事実直面させる。しかしながら、最初は自分の心の中で影に出会うのではなく、それを他の人々に投影する。我々は多くの時間を幾人かの同年輩の不真面目な行動を批判することに費やすし、彼らを駄目なものと非難し、我々はもっとまじな人間であるということを証明しようとする。自分の影を投影している個人（彼は不真面目な習慣的言動をととてもたくさん持っている）に関心を示すことで、我々は自分の影に部分的に命を与える。道徳的にこの人物を非難することで、自分からこの人物を引き離すようになる。自分の影は完全に抑圧されることはないが、しかし影に対する責任から逃れられるので、さし当たり我々は影から解放されるかもしれない。この道徳的葛藤は耐えられなければならないものではない。自分の影に気づくということは、「直接に傷つけられることがないにもかかわらず、他者の不正直に対してどうしてそんなにひどく立腹させられるのか」を自ら問わねばならない、ということの意味している。しかし、我々がこの質問を自らに課すことは稀である。しばしば我々は自分の影を遙かに離れた人々に投影する。そこでは自分の影は最も危険性が少ないことになるだろう。見知らぬ者に、外国の人間に、そして少数民族にそれを投影する。例えば我々は誤って、イタリア人は騒がしいというような偏見に導きがちである。我々は自身の生活の中のどこに、これらの結論を見つけることができるかを点検しなければならない。おそらく我々は世間一般が認めるよりも、もう少し大きな声で、もっと活発で、そしてそれほどコントロールされていない側面を持っている。それ故に影の受容とは、影が我々の一部であって、それを他者に投影することを避けることができるという認識を意味している。これは葛藤を引き起こし、自己一価値の感覚を害する。しかし、いったん影を受け入れることができれば、それは解放と自由と自己一価値の感覚の強化をもたらす。影の受容は葛藤を引き起こす。なぜなら我々が深く恐れ、嫌い、隠すことができない側面を持っていることを受容しなければならないからであり、我々は自分の行為の中に影を見るようになるからである。もし自己一価値がもっぱらポジティブなイメージへの同一化だけに依拠しているなら、それは自己一価値の感覚をひどく害することになる。一方、影を受容することで我々は解放を体験する。なぜならもはや自分自身の非常に積極的な活動性と頻繁に交流している側面を抑圧する必要がなくなり、もはや自分がそうであると思っているよりも、もっと良くならねばならないという必要がなくなるからである。影は、我々が道徳的に悪であると思っているものばかりではない。影には危険な側面があるかもしれないが、にもかかわらず、それはしばしば期待できるような生き生きしている何かを含んでいる。

影の受容は、影響するところが大きい力を持っている。自分の影と親しくなり、その存在を受け入れるとき、我々は他の人々の中の影の出現を期待することすらできるようになる。我々はたいへんな忍耐と慈悲深さでもって弱点と欠点を扱うだろう。もし、影が集合的に良いと認められる価値あるものであるならば、それは傷を正当化することがより容易となるであろう。この忍耐力、あるいは協調は少数民族グループにまで広がるであろう。影の受容は社会心理学的影響力を持つだろう。我々はしばしば、少数民族にとっても悩まされる。というも彼らは支配階級の影を具体化しているからだ。それ故に、影の受容は民主主義と協調には必要条件である。影の受容は政治的レベルにおいては重要になるであろう。やがてそれを実践するように強要されるであろうから。我々は自分の影を遙か遠くの人々に投影する、それというのも何が起ころうとも、それが跳ね返ってこないからである。その結果として、彼らを自分の影の代わりに恐れるのである。しかし世界はどんどん狭くなりつつあって、従来のようにたいへんな努力をしなくても遠くまで旅ができる。我々がこれまでである特徴を投影してきたエスニックな世界から来た人々と我々が出会い、彼らを直接見ることになり、そしておそらく彼らを受容することさえ避けられなくなるであろう。そして次のように認識するのである。彼らは我々が思ってきた人々とは全然違う！では、自分の影とともにしてきたこととは何か？ その解決は影を受容することである。

自分の影と一緒に暮らす、つまり共存を望むということは、あらゆる影の側面をチェックしないで、影が自分の生活に入ることをただ単に許すということの意味していない。影の中に隠れるということはいへんなエネルギーがいることであり、それは人生において愛すべき部分である。我々が悪いと非難してきたことの中にはどれだけ多くの密やかな楽しみがあるであろうか。おそらく我々は一度失ったその楽しみを必ずや取り戻すであろう。しかしそれは、それと共に我々が責任を扱わねばならない道徳的な問題でもある。自分の影に徐々に気づくようになっていくことは我々の責任である。そしていったんそれに気がつくなら、影を扱うことは我々の責任となる。自分の影を受け入れるためには、責任を越えたさらなる高潔さを必要とする。あらゆる意識的な態度は、その他の価値を「影」の中に押し込むことになる。自我理想と影との間の直面化は、繰り返し耐えねばならないことなのである。

影元型の概念はそれを個人的無意識に限定した場合には、S. Freud の無意識の概念と近く、無意識の意識化が精神分析の目的であることを考えると、そこに共通性を思わせる。ただ分析心理学では個人的無意識の深層に更なる集合的無意識を仮定し、影も個人的、人間的レベルのものから、魔物や怪獣に象徴されるような普遍的、超人間的レベルのものまで含めている。個人的無意識の水準で意識化を行う場合、還元法（コンプレックスを両親との関係から生じたものとみなし、様々な現象を過去の親子関係などに還元する方法）も有効であり、そこでは言葉が重要な働きをするのである。しかし、普遍的無意識という深層の水準を仮定するとき、それは言葉で伝達することが困難となり、ファンタジーや、夢、神話、昔話、その他のイメージ表現に頼ることが多くなる。そうしたイメージ表現の元になるのが元型である。本論で取り上げた障害を背負った人々の、とても深い苦しみや悲しみに到達し、そこに接近するためには、こうした普遍的無意識の水準で彼らを理解することが大切ではないかと思われる。

Kast. が言うように、精神的に健康と言われる人々であっても、自らの内にあるこうした影

に直面化して、それをそのまま受容するという事は簡単なことではない。我々はむしろ自我異和的なそれらを自らの内には否認し、あたかも自分には無縁のものと認知する。そして、それら否認したい部分を安心して投げつけることができるような誰かを捜すものである。我々はこうした自我防衛メカニズムを「投影」と呼ぶ。ロールシャッハや描画法に代表される投影法は個人の無意識の内なる何かが刺激（ロールシャッハやTATの図版等）によって活性化され、そこに生じた反応を刺激に投げ返すことを意味し、我々の解釈とは、刺激に対する反応として産出された結果から、被験者の無意識にあるコンプレックスにたどり着く作業である。こうした特殊な技法に拠らなくとも、我々にははるかに多く、そうした自分の暗い要素を自分の近くにいる誰かに投影し、その人を非難したり、攻撃したりして自らの無罪を主張する。それはあくまで自分自身に対して自らを欺くことが第一義の目的である。そうした投影を受けやすいのが、様々な障害を背負った人々である。知らない内に我々は、「障害者は、云々」という見解や所見を持ちがちであるが、その内容を詳しく聞いていると、その中身がいかに発言者のコンプレックスに彩られているかをたえず思い知らされるのである。

4) 影の投影を引き戻すことによる自己理解

以上述べてきたように「投影」というメカニズムは自己の安全性と無実性を守るには実に便利な武器であることがわかる。しかしそれ故に、個人が自己の影を投影している他の誰か、とくに障害者を影として認知するとき、障害者の理解がいかに上記のような個人の主観によって歪められているかを客観的に点検する必要がある。それらが自分の対象に向けた期待や羨望、あるいは敵意や不安、憎悪などに彩られ、過度に高い評価を与えていないか、逆に過小評価していないかを見つめてみる事が重要である。このような無意識のある部分を投影している事実を認識し、自分の内なる何を投影しているかを探索し、それらを自分のコンプレックスとして自らに引き寄せて、自分の問題として探求する作業を我々は、「投影の引き戻し」と呼んでいる。

障害者以外にも、今日ではいじめや登校拒否を起こす子どもたちにもそうした我々の内にある影を投影しやすい。そのため、我々は彼らに「余計なおせっかい」という名の介入をしたり、新聞に投稿して自らの意見を発表したい誘惑にかられる。しかし、実際にそれらの言葉が対象にストレートに届くことは難しい。むしろ彼らから拒絶され、「こんな風だから」と更に相手を遠ざけてしまうことが多い。対象とされた人たちは慰めや意見や同情を必要とはしていない。彼らが求めているのは、傍らで何も言わないで、ただただひたすら存在し続けてくれる人ではないだろうか。おそらくその人は自分の投影を認識し、投影による歪曲化を可能な限り意識化して、それを対象に投げかけることを慎重に用心深く排除し、対象のこころそのものをそっくりそのまま認め、それと共に生きる態度を示す人のように思う。そうした人を「自分を知る人」と私は呼びたいが、「自分を知ること」の第一歩は、これまで述べてきた自分（自我）を否認してきた自分の無意識や影を意識化することである。

ここでは先に述べた「投影の引き戻し」という方法を具体的に述べたい。まず、自分が現在かかっている対象を、もうひとりの自分（＝無意識における自分の影を投影している）として、自分を見つめ直す鏡の像とするのである。そして自分が対象に与えている評価や印象、好悪、その他の感情を丁寧に調べていき、それらが純粹に対象から生じたものであるか、自分自身の無意識の何かを対象に投影し、勝手にそうと決めつけているのではないかをひとつひとつ点検するのである。しかし、この際にも我々は自分を防衛して、あくまで自分の見方は客観的、中立的であって、誤謬や主観性を排除しているものと思いたがるものである。この作業が大切でありながらなかなかうまく進まない理由がそこにある。自分が認めたくない否定的な自分＝影を認知するのは困難であり、それを投影した人物を非難することで自分を守り、同時に自分を欺くという安全な方法を選択する事実をどこまで自分が認められるか、非難したり、攻撃したい欲求が高まったとき、それが自分のどの部分から生じているかを自らに問うことにより、問題の本質に近づくことができる。

投影という隠れ蓑を用いる弊害に陥らないためには第三者の存在は重要である。多くは経験豊富な臨床家がスーパーバイザーとして第三者の役割を果たすことになる。熟練の臨床家は自己の内に観察自我と称する、内省する自我機能を訓練によって獲得し、その機能が健全に働いている限りは投影や転移・逆転移の動きを見落とすことは少ない。しかし、現在の福祉現場でこうしたスーパービジョンを行える熟練した臨床家を得ることは簡単ではない。だがしかし筆者は必ずしも熟練の臨床家に頼らなくとも、グループ・スーパービジョンによってかなり客観的な「投影の引き戻し」の作業は可能であると思う。自分の欠点はなかなか認知できないが、他者のそれは手に取るように理解しやすいからである。問題は、互いに相手のコンプレックスに関与するのであるから相互の深い信頼関係が保たれていなければならないという条件である。それが無い場合には相互の傷つけ合いで終わる危険性が極めて高い。またただ欠点を指摘するだけでなく、相手の欠点を十分に受容しつつ、相手はその欠点を受け入れ易いような伝達の工夫（これが一番難しい課題であるが）が肝心である。

我々は無理して相手（対象）に合わせる必要はないが、強引な価値の押しつけで相手を無理に自分の土俵にのせることも難しい。我々にできることはせいぜい辛抱強く、諦めないで彼らの存在そのものにひたすら関心を持ち続けることだけではないだろうか。そして、攻撃していた相手の要素が、実は自分自身の中にある、自分が認めたくないもの、汚らわしい、醜い、無責任な、破廉恥な、わがままな、どうしようもない自分の中のところであるとして、自分で責任を持ってそれらを引き受けすることができるなら、我々は限りなく、相手にやさしくなれるし、何より、自分自身にやさしくなれると思う。自分を本当にここから愛することができる人間こそが相手（対象）を心底愛することができるのである。自分が嫌いだからという理由で相手（対象）を愛することで満足を充たそうとする人は自己犠牲的であり、そうした場合には早晩、「燃え尽き症候群（バーンアウト・シンドローム）」として、自らを滅ぼしてまで相手に尽くすという共依存の形態をとることになる。それは必ずしも対象のための行為ではなく、歪んだ自己満足のひとつである。そのような献身は多分、対象にとっては迷惑なことになるのである。

受け入れがたい「影」を目前にしてひたすら忍耐すること、じっとそのプロセスの真っ只中に存在しつつ、影からの直接的な影響に身を曝し続けると、逃げ出したいくなる誘惑に負けないで立ち尽くすこと、その作業を徹底して体験し尽くすこと、を自分に課していると、まさに自己の内から不思議な力が作用する。そしてそれらに耐えることがそれほど辛いものとはなくなり、それを直視し、それを客観的に認め、さらにそれを受け入れることが、かつてほどの脅威を自分に与えなくなることが実感できる。むしろそれに積極的に関与し、それを自分の一部として統合することで、自分の人間としての力量を大きくし、懐の深さ、人間的な成熟を味わうことも可能となる。問題は影を排除したい願望、そこから逃げ出したい衝動と自分自身がどう闘うかである。影を見つめること以上に、影から逃げたい衝動と闘う方がはるかに困難である。逃げれば逃げるほど影はさらに大きく我々の後ろから我々を追いかけ、我々の中の脅威を強く、大きくするのである。そのまさに逃げ出したいという衝動が生じたときに、今一步我慢して忍従する、ほんのあと少しの勇気で持ちこたえ、忍耐していると、まさにその時に、内から力が生じてくるという実感は、体験のある方にはとても分かり易いものである。

5) 内なる「障害者元型」を取り出し、その意味を探究する

最後に、内なる「障害者元型」について考察したい。まずは Guggenbuhl-Chaig, A.⁴⁾ から「障害者元型」(Archetype des Invaliden, Archetype of the Handicapped) に関する記述を抜粋する。

生を体験する多くの可能性のうち、二つの対照的な可能性があるように思われる。一方は、自分を健康で力強く完全だとみなす可能性で、その場合には心身の欠陥、侵害、欠損などは克服されねばならない単なる一過性の現象だということになる。他方は、自分を欠陥あるもの、つねに心身をいくぶん障害があり衰弱がちだとして体験し、このような欠陥は端的に人間の属性だと考えるような可能性である。

本人自身は客観的な障害を被っていないとしても、障害者元型は独立して出現しうる。言い換えれば、例えば片方の眼がないとか片足を失ったとかという明かな障害者はたいていは障害者元型を生きているが、その数は予想されるほど多くないし、しばしば予想より少ない。一方、心身共にほぼ無傷の人が障害者元型に魅せられ、支配されることもありうる。そういう人は、実際にはほとんど障害はないにもかかわらず、障害者として振る舞う。

障害者元型を子供の元型と取り違えてはならない。子供も確かに弱いし、劣っていて、大人のもつ属性のいくつかはまだ備えていない。しかし、子供は成長し、変化し、大人になる。

障害者元型を病気の元型と混同すべきではない。病気の行き着く先は健康が障害である。病気はほとんどの場合ある一定の期間だけしか続かない。

障害それ自体からは死も健康も生じない。障害は慢性的な状態であり、身体や脳や精神や心の持続的な欠陥である。どこかが慢性的にうまくいかないのである。

障害者元型はその担い手にとって非常に実り多いものとなりうる。障害者元型は反-自我肥大的で、謙虚さを生み出す。人間の弱さを悟り、解脱が可能になる。障害はそれを担うものにとっては、絶えず

る「死の銘記（メメント・モリ）」であり、心身の諸能力の弱さや限界に直面し続けることである。健康に逃避したり死を回避することは不可能である。障害者元型は忍耐を要請し、人生の慌ただしさを制限する。障害者元型はある意味ではひどく人間的な元型である。

障害者元型はさらに人間関係にとってもきわめて実り多く重要なものである。この元型は非自立性を強調し、相互の依存を受け入れることを余儀なくさせる。しかし今日なお、独立の人間存在という蜃気楼が辺りをさまよいつづけている。（中略）自分自身の障害者性を余すところなく理解するならば、人は絶えず誰かに依存しているのだということを受け入れることもできるだろう。

障害者元型との出会いがもつ厄介さのために、われわれはしばしば障害者元型を個人的にあるいは集合的に抑圧してしまう。（中略）障害者元型が誤って理解されると、われわれは仕事を放棄し、治されるべきものを治すという日々の営みをしなくなるという結果になるかもしれない。

Guggenbuhl-Craig, A. は「人間は誰もが多かれ、少なかれ障害者である」と大胆な提言をしている。そして「完全な健康」という概念に固執する現代人を皮肉の隠った、毒のある言葉で揶揄している。その延長には、自己実現を何の障害もない完全なイメージとして見るあり方、ユング派ではマンダラの出現をそれに重ね合わせて見る向きもあるが、そうしたあり方に警鐘を鳴らし、むしろ何らかの障害を抱えることが普遍的であり、そうした障害者元型を自己の内に深く体験することを提唱している。だがしかし、「自分を知ること」の恐怖で最大のものは、自分の「障害者元型を自覚すること」にあるように思われる。諸々の影の中でも自分が一番認めたくないと思っていた「障害者元型」を自己の内に見出すとき、これまで築き上げてきた価値体系が音を立てて崩れていく。努力する自分、真面目な自分、評価を与えられる自分、賞賛される自分は誰でも容易に受け入れられる。しかし、ここでは全て反対のことが起こるのである。それ故に一層の自己受容の困難さが生じる。それは世間一般の常識、世の中の価値観、同僚や近所の評判との闘いでもある。しかし、自分も障害者であるという認識を深く味わい、体験し尽くすという作業に従事していると、4)の最後で述べたような内なる力が生じる。そして、こうした内からの力を体験し、その分岐点を越えられた時に奇跡が生じる。汚物が黄金に変わる一瞬である。それまでの枠組みが一瞬にして変容し、別の観点が導入され、自分の視野が拡大し、全てを新しい目によって眺めることができるのである。それまで拒絶し、排除し、忌み嫌っていたまさにその対象が中立化したり、逆転して、自分の一部としてなくてはならない貴重な要素に変身することになるのである。ユング派ではその際に、錬金術をアナロジーとして使うことが多いが、そのプロセスにおいて「障害」が「黄金」に変容する奇跡を体験し、「障害こそが私の宝」となるのである。そのことの本当の意味は、自分自身の「傷つきの癒し」であり、こころの中の「内なる障害者」の積極的意味を探ることにある。内的宇宙と外的宇宙は連動しており、内において障害者を生きることは外に存在する障害者との関係が従来とは異なった次元で展開することになる。それをヒルマンは「魂の癒し」⁷⁾ (J. Hillman 1976) と呼ぶ。「魂の癒し」には真の意味での宗教体験（ヌミノース）が必要となる。祈ること、神と共にあること、自己を超越したものと関係することが「魂の癒し」、あるいは「魂の養生」と関係す

るのである。

「障害者元型」のポジティブな面とネガティブな面を検討すると、従来はネガティブな面が誇張されており、ポジティブな面など皆無であると始めから注目を浴びることはなかった。あえて「障害はひとつの個性であり、それは神の恩寵であり、それを受容することでこころを深く受けとめることができる」と発言したとしたら、相手が障害を背負った人やその両親であれば、「なにを楽天的なことを言っているのか、障害を受けることの現実の苦しさを理解しない戯言だ」と一笑に伏されかねない。確かに、障害を受容することは、全ての人間にとって普遍的な運命性であり、それは「選ばれた」ことである。しかし、その重い運命性、その責任を引き受けることの過酷さ、それによる「魂の傷つき」を深く味わい、体験を重ね合わさないと、単なる楽天主義と非難されても仕方ないことになる。障害を持つこと、あるいは障害とかかわることは、それ自身が「大変な傷つき」を体験しているという自覚を持つことが必要となる。この「傷つきの癒し」をどのように行うか、によって「障害者元型」のポジティブな面は始めて姿を現すのである。障害者である対象との同一化をかなり深いレベルで行うことは必然であろう。その上で、やはり自分と対象とは別人格という認識に到達し、その後で「この対象が私の宝となる」、という本当の意味での「障害者元型」を体験する過程があるように思われる。

おわりに

社会福祉に従事する専門家における「影」の問題及び、「障害者元型」について論じた。しかし「障害者元型」に関しては筆者の理解が足りなく十分な説明ができていない。今後、さらに研鑽を重ねて論を深めたいと思う。

この小論を、故村上英治先生に捧げたいと存じます。私を臨床心理学の世界に導いていただいた恩師、村上英治先生（名古屋大学名誉教授）は昨年春に亡くなられた。村上先生は「人間大好き」と口癖のように語っておられたことを思い出す。先生が生前にお約束されて果たせず、筆者がお引き受けした講演の題目は、「“人間”、このこころやさしきもの」であった。「人間大好き」といい、「“人間”、このこころやさしきもの」といい、実に村上先生の思想、哲学がそこに表現されていると思われる。この小論は村上先生に教えを受けた者として、先生から学んだ「障害児・者」とのかかわりの視点に関して、現在の時点で筆者が理解したものの一部である。今後も研鑽を重ねて、「人間、大好き」、「“人間”、このこころやさしきもの」をさらに深く、自ら実感できるように努力したい。

引用文献

- 1) 江口昇勇 他 障害者施設指導員の卒後研修について 同朋社会福祉 第19号 1991
- 2) 江口昇勇 障害者差別とノーマリゼーション「障害者といかに出会うか」所収 黎明書房 1990
- 3) Freud, S. Zur Psychopathologie des Alltagslebens (1901) (『日常生活の精神病理』高橋、池見(訳)著作集4 人文書院 1970)

- 4) Guggenbuhl-Craig, A.: SeelenWusten. Scheizer Spiegel Verlag, 1980 (「魂の荒野」長井(訳) 創元社 1989)
- 5) Hillman, J.: Suicide and the Soul, Spring Publications, Inc. Iring, 1978 (「自殺と魂」樋口、武田(訳) ユング心理学選書④ 創元社 1982)
- 6) Kast, V.: Die Dynamik der Symbole. Walter 1990 (The Dynamics of Symbols. Translated by Schwart, A. S. 1992)
- 7) 前田重治「図説 精神分析学」誠信書房 1985
- 8) 小此木敬吾 精神分析理論「精神医学総論Ⅱ a 2」所収 中山書店 1980
- 9) 末松弘行他「エゴグラム・パターン」金子書房 1989
- 10) 渡辺久子 障害児と家族過程「講座 家族精神医学3」所収 弘文堂 1982